

に年號鏡(神獸鏡)十二面を載せて居る。而して編者は一當初は三國時代の吳に屬する紀年鏡がもたらされたのであつたが、次いで時代の漢末に遡る相似た紀年鏡の外に新たに多數の畫象鏡を見受ける事となり、又その出土地の局部が紹興の内の四家郷附近である事も傳へられ、やがてこの畫象鏡の方が夥しい數量を示すに至つた事、而もその畫象鏡は紀年鏡が概ね小形であるのに對して鑄造の佳良な大形の類に屬し、兩者稍々趣を異にするが、然しこれらは一様な特色のある銹色を呈して、恰も安徽省壽縣出土の各種銅器の場合に於けると同様、同一地區の出土品なる事が推される旨を述べ、地域的な一插遺物としての性格を明かにされて居る。

各圖版には、夫々に詳細な説明を加へて編者の觀察を具さに述べられて居るが、卷頭には序記として、本書に收めた諸鏡の鑑鏡史上にもたらす意義等を概括的に述べ、嘗つて畫象鏡を以て六朝上半のものとされる富岡先生と、玉葬代の一鏡式とされる高橋先生との相反する見解に對して、玉葬を中心とする時代の樂浪遺物に畫象鏡が見られないと言ふ消極的事實にとゞまらず、本一插遺物の出現が、積極的に同出の紀年鏡の示す實年代からして同式鏡が新たに漢末から三國代に主として行はれた事を證し、玉葬代はもとより六朝代に入つて盛行したとする他の考説に對しても、その必ずしも當らない事を述べられた。又編者は單にかゝる同出の年號鏡のみによらずして畫象鏡自体にも形式學的考察を及ぼしてその先後を推し、又その、夫々の鏡を諸要素に分解して考察する時一例へば外區に於ける流雲紋の如き一明らかに漢に盛行した四

神鏡の末流退化型式のものとの間に連系が考へられて上記の年代觀の妥當性が考へられる事をあげ、將來かくの如く各鏡式を通じて要素の分解的な型式學的考察を試み、然る後それを大きく綜合する事から相互の連系が一層緊密となり、動きなき全體觀の基礎が確立すべき事を提言された。

なほ圖版には斷面圖を加へて、閱者に鏡背文のみならず鏡體構造の變遷を察するに便せしめ、更に又各鏡には下段にその背文の最も見るべき部分の細部圖をのせて觀賞に供せられて居る。この新しい試みはそれが鏡背上に表はされた繪畫的なものを明確にして右の分野に資料を提供する編者の意圖に基くものであつて、上記の年代觀を併せてそれ等が當代の繪畫を推し、又風俗其他を放へる上に役立つ事は切に念ずる所であると述べられて居る。支那繪畫史上、文獻のみにて實物に接する事なく、その點甚だ資料に乏しい當代に於いて、單に鏡背文として、畫像として之を取り上げる事は頗る必要な望ましい事であるが、從來の諸圖録の收むる所がとかく全影のみにて細部をうかゞふに足らなかつた事實に顧みる時、この新しい試みが、この方面の研究にも必ずや貢獻すべき事を思ふのである。(素名文星堂發行、定價拾八圓)(岡田芳三郎)

### 慶長末年以前の梵鐘

坪井良平著

十二三年前『考古學講座』の『梵鐘』を執筆して優れた見解を示さ

れた著者は、其後更に關係遺品の檢出と調査とに精進して、それ等の上に立つて我が佛具中特色の豊かな梵鐘の諸性質を闡明したのが本書である。卷頭の概説は此の研究の結果を平明に説いたもので、充つ梵鐘各部の名稱から、現存品の分布を觀、以下鐘の口徑・高さ・撞塵・乳・龍頭・笠・上下帶の裝飾等各部の形式學的考察を載せ、また銘文の時代順に依る觀察から、其の體裁、内容の變遷を説き、結論として是等の推移上に示現せられた時代相を論じて居る。後半は右の所論の基礎となつた慶長末年以前の遺品の年表であつて、載する所文武二年の大和妙心寺鐘以下の有銘鐘三百八十口(外に卷末追加二口)同じ時代と認むべき無銘鐘三十二口の多數に上り、單に年代順の綿密な表の外に要目一覽表、同分布表などをも添へ、最後に三種の索引を附して、資料利用者の便に備へると云ふ極めて念入りのものである。

本書を読んで氣附くのは著者が研究の確實を期する爲に遺品の調査檢出に多大の苦心と努力とを拂ふたことである。これは其の過半を占めるあまり見榮のない表の上によく表はれてゐる。氏の梵鐘觀はか様に基礎を固めた後で、それから歸納すると云ふ方法が取られてゐる爲に、所論も無理がなく、加ふるに資料が殆んど全部年代の明なものである點で、遺品の各部の形式觀から引いて年代に依る梵鐘の變遷論の如き、考古學上一つの標式的な好例とさへ見られる手堅さを示してゐる。此の點で著者の資料蒐集に拂はれた苦心は充分に酬はれたと云ふ可きである。たゞ此の現在資料に重きを置くと云ふ立場から、時代に依つて鐘の遺存する

條件が必ずしも同一でないこと、例へば時代の遡る程實際鑄られた鐘が失はれる見易い事實が、論述の間に闕却されて、現存數をば直ちにその時代に作られし數と見なして時代の文化論が試みられたのは一考を要する部分ではなからうか。なほ此の書が實質に於いて、梵鐘研究の現在の水準を示し、そこに資料が集大成せられてゐるのを見るにつけ、著者にとつて左程困難でなかつた筈の從來の關係文獻目錄の缺けてゐることも評者には一つの瑕瑾に見える。それは兎も角として、大阪鐵工所と云ふ様な別個の職務に與つてゐる著者に依つて、この如き基礎的な業績の擧げられたのは特筆せらるべきであり、また近年膨大な出版物の間に、本書の如き勞作が、四六倍判假綴二百頁以内と云ふ手に入り易い形で公にされたのもゆかしい事である。(大阪市阿倍野筋三丁目東京考古學會發賣、定價參圓)(梅原末治)

靜岡縣 磐田郡 松林山古墳發掘調査報告

後藤 守 一  
内藤 政 光 共著  
高橋 勇

本書は東京帝室博物館に夫々職を奉ぜられる後藤・内藤・高橋の三氏が、靜岡縣磐田原古墳群の一中心をなす松林山古墳(前方後圓墳)を發掘調査された報告書である。前後九日に渉る實際の發掘に與つたのは内藤・高橋の兩氏で遺物の整理の多くもまた其の手に成つたのであるが、是等が後藤氏の手で更に整理の上、そ